

## フランスのブールバール演劇について

—— クールトリーヌの「わが家の平和」

Sur le théâtre du boulevard en France

—— <La Paix chez soi> de Courteline

梶川 忠

Tadashi KAJIKAWA

Le théâtre du boulevard est surtout une comédie digestive. Dans cet essai, nous traitons <La Paix chez soi> de Courteline où se déroule une dispute quotidienne d'un ménage. Ça nous intéresse? Bien sûr. L'astuce et le monologue s'en rangent subtilement et le public oublie l'heure.

boulevard とは(並木のある)大通りであり、昔の城壁跡につくられた通りである。王政復古の時代(1824-48)に、その大通りのひとつであるタンブル通りboulevard du Temple、俗称犯罪通りboulevard du Crimeに、ラ・ゲーテ座Théâtre de la Gaité、フォーリー・ドラマチック座Théâtre des Folies dramatiques、フナンビュル座Théâtre des Funambules等の劇場が立ち並んでいた。この賑わいは映画「天井桟敷」に生き活きと描かれている。そこで、そういう劇場で上演された軽演劇のことを「ブールバール劇」称したのである。

第二帝政時代(1852-70)になると、生活に飽満したブルジョワたちがしかつめらしい文学劇に飽きて、肩のこらない演劇を求めてブールバール劇場に集ったのである。

ブールバール劇の特徴は「腹ごなしのための演劇」と呼ばれることからわかるように、教訓的思想的意図がなく、娯楽第一の演劇であることと、戯曲そのものよりも芸達者な役者で潑刺とした舞台をみせることにある。大部分は喜劇であるが、そのなかに世相が反映し、軽い風刺が浮かび出ることもある。

小論ではそういうブールバール劇の特徴を探ってみたい。

ただし漫然といくつかの作品に取り上げるのではなく、ウージェーヌ・ラビッシュEugène Labiche(1815-88)などと並ぶ、ジョルジュ・クールトリーヌ Georges Courteline(1858-1929)の代表作「わが家の平和」La Paix chez soi(1903)に絞って検討することにする。

クールトリーヌ(本名 Georges Moinaux)は、1881年に「現代パリ」Paris-Moderne という小冊子を発刊、文壇にデビューした。間もなく兵役に従事する。除隊後自分の兵営生活に取材した「陽気な騎兵隊」Les Gaietés de l'Escadron(1886)などの戯曲を書く。中年の男が付き合っている未亡人に男がいることを知り、突き止めるが、逆に未亡人はとことんこの事実を否定し、中年に謝罪させるという戯曲「ブーローシュ」BouBouroche が自由劇場で上演され(1893)、劇作家としての地位を確立する。小官吏を題材にした「署長さんはお人好し」Le Commissaire est bon enfant(1889)、「第330条」L'Article330(1900)、小市民の生活を描いた「わが家の平和」La Paix chez soi(1903)、「バダン君」

Monsieur Badin(1897)などの作品がある。小モリエールと呼ばれる。

「わが家の平和」は一幕物であり、登場人物もトリエル Trielle(36歳)とヴァランチヌ Valentine(25歳)という夫婦ふたりだけである。亭主はずっと舞台に出たままであり、女房は2回出入りする。その出入りによって状況が変化するのである。

第1の登場——亭主から10月分の生活費をもらおうとするが、150フランを削られる。手練手管を使って分捕ろうとする。

第2の登場——家出のために別れを告げる。

第3の登場——涙を流しながら告白して、亭主をたらし込む。平和が訪れる。

まず夫婦の対立、緊張が存在し、それが徐々に高まる。ピークに達したところで、決裂してしまうのではなく、「わが家の平和」というタイトルが示すように、最後は穏やかに幕が下りる。どちらが妥協するのか。いうまでもなく亭主である。

幕が上がると、トリエルが事務机に向かって、新聞小説の原稿を書いている。文章に注意を払うよりも、字数を増やすことが肝心である。決して後世に名前を残すような作家ではない。いわゆる三文文士である。そこに妻がやってくる。

結婚して5年経つこの夫婦は倦怠期に入っている。ふたりは顔を合わせれば口げんかになる。

鍵をかけて仕事をしている亭主に向けた妻の最初の台詞。

Valentine Eh bien, en voilà du mystère!  
Tu fais donc de la fausse monnaie?  
ヴァランチヌ なによ、そんなにこそこそして。贋金でも造ってたの。

fausse monnaie 「贋金」というきつい言葉は、亭主をからかったのではなく、毒を含んでいる。仕事をしているのが判っているのだから、あくまでも鍵をかけていた、自分を拒絶していたという状態への当てつけになっているのだ。

この発言で夫婦の間に流れているものが判る。だから相手の言葉にしつこく絡んでいくことになるのだ。初めてこの芝居をみた人なら、離婚という結果を予想するかもしれない。それくらいふたりの対立は厳しさを増していく。だが見慣れた観客は少しも緊張しない。ただふたりのやり取りを楽しんでいる

だけである。

Trielle Je t'explique que mon travail...  
(Au mot de travail, Valentine part d'un  
bruyant éclat de rire.) (.....)

トリエル おれの仕事は・・・(この仕事という語を聞いて、ヴァランチヌはけたたましい笑い声を立てる) (.....)

Valentine Et si tu crois le faire pour  
plaisir des autres, tu te trompes enco-  
re bien davantage.

ヴァランチヌ あんたは、それが人の楽しみになるとでも思ってるなら、それこそ、なおさらもって、大間違いよ。

三文小説が世のため人のためになるとは、トリエル自身考えてもいない。生活のために書いているのだ。だがそういう自己認識と他人の判断とは別である。しかもヴァランチヌは笑い声と言葉で二重に亭主を傷つけるのだ。その後の <ne me dire que des choses blessantes> 「人を傷つけることしか言わない」というトリエルの嘆きは正直なものである。

彼は復讐を密かに考えていた。新婚時代には妻を説き伏せようとした。不可能とわかると尻を叩いた。だがこれは気分のいいものでなかった。次に家具置物の類をたたき壊した。だが <Le fâcheux est, ô Valentine, qu'il n'en soit pas du mobilier comme du phénix qui renaît de ses cendres. 「厄介なことは、ああ、ヴァランチヌ、灰の中から生まれ変わる火の鳥のように、壊れる尻から元の形になる家具がこの世にないことだ」という判断で中止せざるをえなかった。

Trielle Bah! nous verrons bien, de nous  
deux, celui qui rira le dernier. (Valenti-  
ne, étonnée, le regarde.)

トリエル まあ、いいさ、いまにわかる、ど  
っちが後で笑う番になるか。(ヴァランチ  
ヌ驚いて相手の顔をみる)

フランスでは男が財布を握っていた。生活費は毎月夫が手ずから妻に渡すのである。この家の一月の生活費は800フラン。しかし妻の求めに650フ

ランしか与えない。詰る妻に、夫への尊敬心をもたない妻が気に食わぬことをいうたびに、手帳に罰金をつけていたのだといい、それが150フランに達したと宣言する。

かなり陰湿な復讐である。

Trielle Septembre. Du 1er: Pour avoir tranché une question sans en connaître le premier mot, puis, convaincue de son erreur, s'y être cramponnée de parti pris avec une insigne mauvaise foi, afin d'avoir raison quand même et d'exaspérer le sieur Trielle, homme modéré, patient et doux... 3 fr. 95 (下線はイタリックを示す)

トリエル 9月1日 頭から知りもしない問題をさっさと片付け、その後、誤りと知りながら、どうしても我を通そうとして、見え透いた悪意の下に、頑として自説に固守し、ついに温厚、柔和にして辛抱づよきトリエル氏を憤らせた咎により・・・3フラン95セント。

Trielle Du 2: Pour avoir, le sieur Trielle ayant exprimé le désir de dîner un quart d'heure plus tôt, fait servir un quart d'heure plus tard, et répondu audit Trielle qui se plaignait sans acrimonie: <Si tu n'es pas content, va-t'en dîner.>... 6 fr. 70

トリエル 同月2日 夕食を15分早めにしてくれとトリエル氏より希望ありたるにもかかわらず、かえって普段より15分遅れて出し、トリエル氏が言葉穏やかに不満の意を述べたるに対し、「不服ならさっさと出てって、外で食べたらいじゃないの」と答えたる咎により・・・6フラン70セント。

このやり方に啞然とするヴァランチーヌだが、彼女の方にもどうしても150フランをもらわねばならない理由がある。フランスでは、妻が夫の承認なしに小切手にサインすることは禁じられていた。ところが色ガラス張り吊ランプが欲しくなったばかりに、ヴァランチーヌは夫のサインを真似て小切手を

振りだしてしまい、その支払い日が今日なのである。

Valentine Bien. (Etendant le bras vers la croisée) Tu vas me donner mon argent ou je vais me jeter par la fenêtre.

Trielle par la fenêtre!

Valentine par la fenêtre.

Trielle, tranquillement, va à la fenêtre qu'il ouvre. Saute! (Un temps) Allons, saute! (Valentine demeure immobile, attachant sur Trielle les yeux chargés de haine. Enfin:)

Valentine Tu serais trop content, assassin!

ヴァランチーヌ そう。(窓の方に腕を伸ばし) お金を渡しなさい。さもなけりゃ、窓から飛び下りるわよ。

トリエル 窓から?

ヴァランチーヌ 窓から。

トリエル (平然と窓を開けにいき) 飛べ! (間) さあ、飛べ! (ヴァランチーヌは動かない。憎悪の色を目に浮かべながらトリエルを見つめている。やがて)

ヴァランチーヌ そうすりゃ、願ったり叶ったりでしょ。人殺し。

激昂する妻に対しあくまでも冷静な夫、感情的な女に対し理性的な男という、通俗的で分かりやすい対比である。

だからヴァランチーヌの脅しは失敗におわり、さらに追徴金が課されることになる。

Trielle, à sa table, courbé sur son calepin. Octobre. Du 1er: pour avoir menacé le sieur Trielle de se suicider sous ses yeux, tenant ainsi d'exploiter, la tendresse de cet excellent mari... 4 fr. 95 (・・・) Pour ne l'avoir pas fait... 10 sous.

トリエル (テーブルに着き、手帳の上に身をかがめ) 10月1日。トリエル氏を脅迫するに、その面前にて自殺せんとし、かくて善良なる夫の情愛を搾取することを企てた咎により・・・4フラン95セント。(・・・) しかもついに実行せざりし咎により

・・・50セント。

我慢できなくなったヴァランチーナは「里に帰る」という捨て台詞を残して、舞台から去る。トリエルは何事もなかったように、また仕事に取りかかる。それは幕開けとまったく同じ態度である。妻は彼になにほどの波風もたてることができなかったのである。

彼が行数を数えていると、妻が旅行用のマントを着、カバンを手にもって現れる。ヴァランチーナの訴えるような台詞とトリエルの冷たく拒絶する台詞のやり取りがある。

Valentine Eh bien, adieu.

Trielle Eh bien, adieu.

Trielle se remet à la besogne.

Valentine C'est égal, on m'aurait rudement étonnée, si on était venu me dire hier que tu me flanquerais à la porte aujourd'hui.

Trielle je ne te flanque pas à la porte.

Valentine C'est le chat. Qu'est-ce que tu fais alors?

Trielle je ne te retiens pas. C'est tout.

ヴァランチーナ それじゃ、ご機嫌よう。

トリエル それじゃ、ご機嫌よう。

トリエルはふたたび仕事に取りかかる。  
ヴァランチーナ でもね、もし昨日だれかが来て、今日わたしが追い出されるっていったら、わたしはどんなにびっくりしたでしょう。

トリエル おれは何もおまえを追い出しはしない。

ヴァランチーナ 猫でしょうよ、そりゃ。じゃなんていうのあんたのすることは。

トリエル おまえが出ていくっていうのを引き止めない、ただそれだけだ。

ヴァランチーナの第二の手管も通用しない。二度と戻らないとは、どちらも考えていない。ただ相手が折れるのを待っているだけだ。だがどうしても金を出させねばならない女の方が、決定的に立場が弱い。だから夫は強く出られるのだ。

Trielle Tu veux t'en aller, va-t'en. Tu ne penses pas que je vais te garder de force, m'imposer à ton aversion et te fixe au mur comme un gros papillon, avec un clou dans l'estomac.

トリエル 出ていきたいんだろ、出ていけよ。

考え違いをするな、おれがおまえを腕づくで側においておくなどと。わざわざ恨みを買ってまで、おまえを大きな蝶々のように壁に突き刺しておくなどと、しかも胃に針を刺して。  
間。

当然この「間」は、二の句が告げないヴァランチーナの動揺を表している。彼女はキスをねだるだけで、舞台から姿を消すのである。だが150フランを払えなければ、どこにしようと警察に捕まらねばならない。彼女には居直りしか残っていない。

Valentine, lentement, passe la porte, mais à peine a-t-elle disputé, qu'elle rentre, dépose sa valise, et revenant à son mari:  
Valentine Donne-les-moi, mes cent cinquante francs.

ヴァランチーナはゆっくりと戸口から出る。が姿が消えたと思ったらすぐに引き返して、カバンをおき、夫の側に近づく。

ヴァランチーナ ちょうだいよ、私の150フラン。

ヴァランチーナはもう150フランしか考えられなくなっている。要請に対するトリエルの答えには、「優しく(avec douceur)」というト書きがついている。これ以降は台詞と同時にト書きがが大事になってくる。

Valentine Je t'en supplie, je t'en jure, donne-moi mes cent cinquante francs! Si tu ne me les donnes pas, je vais devenir folle!

Trielle Pour ce que ça te changera...

Valentine Ecoute.

Trielle, un peu agacé, un peu amusé aussi.  
Oh!

ヴァランチーナ お願いだから、ねえ、一生の

お願い！ ちょうだいしたら、わたしの150フラン……。くれないなら、わたし氣遣いになるわよ。

トリエル そうすりゃ、もともとじゃないか。

ヴァランチーナ ねえ、聞いてよ。

トリエル (少しいらいらして、同時におもしろがって) ああ。

トリエルはヴァランチーナのしつこさに辟易し、しかしこれほどしつこい以上何かあると思っている。

Trielle, étonné de la façon dont le mot a été prononcé.

トリエル (相手の言葉がいつにもない調子なのに驚き)

Trielle Tu as fait une bêtise? (Mutisme éloquent de Valentine) Naturellement. Laquelle?

トリエル なにかハマをしないでかしたんだね。(ヴァランチーナの雄弁な沈黙) そりゃそうだろう。どんなことだ。

ヴァランチーナに他の手段はもうない。あっさり和小切手のサインのことを告白する。

Trielle, abasourdi. Et tu viens me dire cela avec ton air tranquille?... Mais c'est un faux!

Valentine Qu'est-ce que ça fait? A cette réponse inattendue, faite d'ailleurs sur le ton de la plus absolue bonne foi, Trielle demeure sans un mot. Il contemple longuement la jeune femme, comme frappé d'admiration.

Trielle Allez donc répondre à cela! (Il complète sa pensée, d'un large geste d'impuissance.(...))

トリエル (呆気にとられて) で、そういう風に平気な顔をして、そいつをおれに言いに来たのかい。そいつは詐欺だよ。

ヴァランチーナ かまわないじゃないの。(この意外な返答、しかもそれがもっとも善意にみちた調子を含んでいるので、トリエルは二の句がつけない。しげしげと若い妻をみてい

る。感嘆これを久しくするといったように) トリエル その返事が気に入った。(彼はさも気が抜けたというような大仰な身振りをする。それが彼の考えをことごとく表している)

居直ったヴァランチーナにはもう怖いものはない。そして亭主の気質は飲み込んでいる。最終的には自分の意見がとおると確信している。観客にはそれまでのやり取りがゲームであったかのように思えてくるのだ。

つぎの長めのト書きがそれを語っている。

Trielle Elle y est arrivée! Ça y est!...

Sais-tu que des gamins reçoivent des calottes qui les ont méritées moins que toi? Att-on idée d'un tel appétit de lanterne!... (Il garde le ton de la dispute, mais la conviction n'y est plus. Au fond, on sent qu'il perd devant cet excès d'enfantillage.)

トリエル いやいよおいでなすったか。とうとうやったな……。いいか、子供でもビンタのひとつぐらい喰わされるぜ、これよりももっと軽いことがらでだぜ。なんだってまた、そんなにランプが欲しかったんだ……。 (調子は喧嘩腰であるが、自信はもうなくなっている。実際あまりの子供っぽさに張り合いが抜けているのがわかる)

口とは裏腹に、このまま妻が突っ走ったらどうなるのかと、亭主は不安になっているのだ。素早く亭主の心理を見抜いた女房は、取って置き的手段を繰り出すのだ。涙である。ランプをどのように入手し、どのように運んだかを語る台詞に付けられたト書き。

(Tout ce récit a été dit d'une voix lar-moyante de petite pauvre, secouée de sanglots mal contenus. Trielle l'a écoutée gravement, se gardant bien d'interrompre, la tête agitée, par moments, de ces hochements approbatifs qui se moquent avec l'air d'apprécier. Mais Valentine ayant achevé:)

(この物語は、始めから終わりまで涙声でつづけられる。何か悪いことをした女の子が、

こみ上げてくる嗚咽をこらえられずに身体を震わせているという形である。トリエルは一言も口を挟まないで、相手の言葉を鹿爪らしく聞いている。ときどき頭を縦にふる。「なるほど」というような調子ではあるが、実際にはからかい半分である。ところがヴァランチーナが喋りおわると)

嫌ってはいない女が泣きだした以上、男は許さざるをえなくなる。万国共通の心理である。トリエルはランプ代の150フランと生活費の不足分150フランの両方を支払わねばならなくなる。つまりヴァランチーナが引き起こした損害は帳消しになるのだ。女房の大勝利である。

Du coup, délivrée à la fois de la crainte d'une diminution et de la terreur du genedarme, Valentine se sent touchée. Elle va à Trielle, le fixe longuement dans les yeux. Puis, d'une voix où se trahit la profonde surprise d'une personne qui fait tout à coup une découverte inattendue:

Valentine C'est pourtant vrai que tu es un bon mari.

Trielle Il est fâcheux que tu t'en aperçoives le jour, seulement, où je réussis à te faire peur.

Elle ne répond que d'un petit mouvement de corps, tendre et câlin; un remords qui se fait caresse. Elle se glisse dans son bras dont ensuite, de force, elle se ceinture la taille, et elle demeure nichée, honteuse, le front reposé à l'épaule du jeune homme qui l'a laissé faire sans rien dire.

(生活費が減る心配と警察沙汰の心配を同時に免れた彼女は、胸がつかまるほど嬉しく、トリエルに寄り添ってつくづくと目を見守る。やがてそれは、突然意外な発見をした人間の、とてつもない驚きがその中に含まれている声で)

ヴァランチーナ 本当に、あんたは立派な夫だわ。

トリエル 情けないよ、今やっとそれが分かったのか、怖いものをみせられて。

(彼女はそれに答えるともなく、ちょっと身体をやさしく、甘えるように揺すぶってみせる。悔恨がゆるくこみ上げてくる。彼女は夫の腕の中に滑り込む。その腕を無理に自分の身体に巻きつける。そして恥じらうように額を男の肩にもたせかけ、身体をすくめたままじっとしている。彼は何もいわずに、されるがままである。)

されるがままになっている男は、自分の情けなさを噛みしめている。と同時に妻の可愛らしさも感じている。妻の反抗を金銭で評価して、手渡す生活費から削るといふ、絶好のアイディアは宙に消えてしまい、銀行に渡す150フランも、生活費の不足分150フランもともに負担する羽目になるのだ。トリエルは妻にいいように振り回されたままでおわる。

Que de puérité, mon Dieu!.....Que d'inconscience!.....Que de faiblesse!

何という子供っぽさ!・・・何という罪のなさ!・・・何という弱さ!

というト書きが明瞭に示しているように、脳みそが空っぽで、動物的本能に従って行動する女には、いかに優秀で力をもった男でも勝てはしない。男にできることは、

Trielle Misère!...

トリエル 情けない・・・。

と呟いて仕事に戻ることだけなのだ。

「なべて世はこともなし」といふ、平和な一家の芝居がおわる。

たわいもない筋立ての芝居であるからには、趣向が凝らされていなければならない。そのひとつが言葉遊びである。

Valentine Sais-tu ce que tu me rappelles?

Trielle Un daim.

Valentine C'est prodigieux! Tu as le don de la divination.

ヴァランチーナ あんたがわたしに何を思い出させるか知ってる。

トリエル 鹿だろう。  
ヴァランチーナ まあ驚いた。当てごとの名人  
ね。

「当てごとの名人」と訳したフランス語は le don de la divination。don は「天賦の才能」であり、こんな戯言で使うべきではない。わざとあてこすっているのである。

Valentine Sais-tu ce que tu me fais!  
Trielle Je te fais suer.  
ヴァランチーナ あんたがわたしに何をするか  
知ってるか。  
トリエル うるさいんだろう。

では、faire 動詞で聞かれたときには、しかるべき動詞で応えるものだが、ここではわざと繰り返している。

Valentine (・・・)il me sera d'y faire face.  
Trielle tu leur tourneras le dos.  
ヴァランチーナ 顔を向けることはできないわ。  
トリエル おまえは背を向けるよ。

というようにfaceとdos という反対語を用いて、観客の笑いを誘うのだ。

こういう掛け合いの場面と、ひとりが一気にまくし立てる場面とを組み合わせることで、何事も起こらない芝居は、観客の興味を逸らさないように作られているのである。

(受理 平成11年 3月20日)